

第4回もうひとつの住まい方研究大会 2008



【基調講演】

「誰もがありのままに、その人らしく地域で暮らす」をテーマにした県民主体の福祉政策づくり

講師：千葉県健康福祉政策課 野村隆司

講演レジメ

- ・ 海の色は何色か
- ・ 千葉方式を取り巻く3つの社会的背景
- ・ (健康福祉) 千葉方式
- ・ 一味違った作業部会・研究会・民間の創意工夫によるタウンミーティング
- ・ 一体感を持ち共感・共有できるキャッチコピーとイメージ戦略の創出
- ・ 参加する民間の方々と迎える行政の苦悩と醍醐味
- ・ 縦割り行政の枠を超えるヒント
- ・ 千葉方式の最近の成果 - プレーメン型地域社会づくり第1号モデル事業
- ・ プレーメン型地域社会
- ・ 現場の地図、写真
- ・ 問題提起
- ・ 事業化までの流れ
- ・ 第1号拠点施設の概要と特徴
- ・ モデル事業の3つの特徴

〔本日のアウトライン〕

海の色は何色か考えて見ませんか(問題提起)

〔イントラダクション〕 現代の世相

- ・ 電車男・姉齒事件(耐震偽造問題)・コムスン介護保険介護報酬不正請求など
バーチャルな世界・不正義が行われている

例えば役人も自分のことだけを考えて、自分たちがどうしたらいいか考えていない。

韓流ドラマには日本人の失った純粹さがある。

〔現在の3つの社会的背景〕

- ・ 歴史的転換期

戦後、欧米に追いつけ追い越せとすすんでいた。成功して欧米並みのライフスタイル・自由を得られた。しかし失ったものもあるのではないだろうか。

周囲への無関心・個人私情主義

- ・ 社会の閉塞感

憲法 25 条から福祉国家を目指そう = 行政フツ化現象

結果：福祉国家行政機構・巨大化した市場、一方では受身の国民 現在の社会の閉塞感に繋がっているのではないだろうか。

- ・ 行政の細分化と縦割り行政の弊害

地方集権 各省、各局等、同じ省同じ局の中であっても自分の隣の人が何をやっているのかわからない。そういった中で細分化された統一のとらないスタッフ

〔県民主体の千葉方式〕

7 年前からスタート「県民主体の千葉県にしていこう」

特徴

1．縦割り排除 = 自分の所管外になるとだまる。

2．生活の当事者であり主権者である県民の意見を大事にしていこう

施策形成に本当に役立ててきたのか

民間の方々に意見を出していただいて、それに対して行政が答えていく

行政と民間の役割分担をしていこう。

あくまで政策の目的・ゴールではない。

〔何からはじめたか〕

作業部会、研究会の開催 分野横断的なテーマ設定をして議論をはじめた（民間が入る）

アクションプラン（県の重点施策）

作業部会、研究会であがったものを県の施策決定の手続きの中に組み込む。

タウンミーティングの開催

- ・「どこでもいつでもだれでも」開催して、県民に意見を言ってもらおう。

- ・男性、主婦等々、テーマを断定しないしなりを作らない。

- ・審議会（シナリオをつくる）：議論を決めて決定していくことはひつようの為

- ・とりあえず行政は聞く

- ・民間の中からリーダーをつくる

（タウンミーティングの様子の写真）

行政が仕掛けるのではなく県民の方々にグループを作ってもらい、行政は乗っかる

3000 回のタウンミーティングが千葉県中で行われている。

すなわち県民主体で民間と行政は一体化できるのか
県庁職員向けにセミナーで話をした

- ・官の論理は県民に通じない
- ・民間の代理店を担う
- ・夢やロマン
- ・キャッチコピー（心のこもったキャッチコピー）

〔参加する民間の方々の苦悩と醍醐味〕

- ・問題意識を持っているのは県民
- ・提案には義務と責任がある = プレッシャー（苦悩）
- ・一つ一つ進んでいくことで醍醐味を感じる。

〔行政の苦悩〕

- ・黙って議論を聞く
- ・最初は 驚愕 怒り 放心 諦め 共感 共同というプロセスを経て県民主体の千葉方式がすすんできた。
- ・民間の委員と行政とで真剣勝負をしなければならない。
折衷的なものが生まれてくる
- ・県民の発想の原点（行政の無意味な権限争いはない）

民間と行政が協同していくためには、

- ・活力と多様性（ダイバーシティ）
- ・愛と執念そしてサイエンス：ひらめきとかん
- ・規制区、地域返上はやめよう。
- ・義理と人情を考えながらやっていくべき

と考える

〔具体的な話〕

県民主体の街づくり プレーメン型地域社会づくり第1号モデル事業

<住民の方々でつくった事例>

出展：プレーメンの音楽隊をモチーフ（子供、障害者、高齢者）誰もが仲良く住み続けられるまちづくり

問題提起：地域づくりの拠点をつくる（習志野市）

みんなが集まれる拠点

1805㎡土地（県がもっている）をつかって地域づくりの拠点をつくる

行政にお金がない 行政が一方向的に図面をひくのではなく地域ニーズの施設を作っていくたい。

協同してどうやって作っていくのかが問題提起

地域の方々に何があれば地域の全体的なネットワークができるか

議論を始めるが最初は「夢のような話でできるのか」と言われ、不安なまますごし始める
県、日本大学、習志野市の職員で 13 回研究会を行う

<誰が事業をお金出してやってくれるのか>

県外の人たちに働きかける（事業者探し）

地域の方も含めて研究会を進めモデルプランができてきて、事業の検討がはじまった。

<20 年度、施設を整備していただける民間事業者の公募を行う>

公開プレゼンテーション（研究会メンバーが審査委員）

コンセプト：地域・地元の大学・民間・日本建築学会・行政が協同

・社会福祉法人に決定 5 億 3 千万円

3F 建て（民間事業者・行政・大学等が入る部門）

1F（保育・障がい者の売店）

2F（デイサービス・訪問介護）

3F（ショートステイ定員 20 名）

1F（地域包括・多目的ホール・住まい作り相談コーナー）

図面を見ながら説明

特定の方だけではなく高齢者、女性等誰でも入れる様々な地域住民の利用が可能な施設

千葉県、日本建築学会、日本大学との協同事業 相談機能をもつ

民間の発想も組み込まれている

コミュニティセンターで締結式を行った。

その後も地域住民と定期的に建設、運営について議論をし続けている

<事業の特徴>

地域住民の思いを提案したい（民間）

県有地を活用した施設 協同していけば 2 号 3 号と続いて地域社会づくりに繋がっていく

来年の夏には竣工オープン予定

<海の色は何色（冒頭）>

写真は青色だが・・・ある小学生はスケッチを描いたときに緑の海を持ってくるかもしれない。

その時に先生が「青色だよ」というのは違うのではないかというのが問題提起

例えば沖縄と千葉では海の色は違う。

すなわち場所によって違う。季節によっても違う。一つの海をみんなでみていればそれぞれ違うように
色々な価値観、多様性が県民主体である。そこから政策作りをしなければならないということ。

<期待>

新しい発想を持った住まい作り、街づくりを知識と技術と経験をもちいて発揮していただきたい

千葉県庁にお越しの際には立ち寄っていただきたい

<おまけ>

2002年～2007年の千葉方式の活動をスライドショー

<Q&A>

うまくいった秘訣とは

研究会の方々からの提案に対しての行政の動き、障害、保育の事業所をまわったがだめだった。

なぜ？

研究会がこういう風にしようというのを押し付けていた。違うと思う。研究会の方々の発想に対して意見してくださいという方法に切り替えた。結果として千葉方式とは逆のことをしてしまった箱物をつくるのが目的ではない。

箱物をつくる過程での関係者との境遇

箱物をつくってからの関係者の協同

地域のサテライトで地域の方々事業者、市、県と毎週のように打ち合わせをしてどのようにしていくのか議論をしている。竣工してからも続けて地域づくりをしていく。

以上